

近代博物館における人文資料形成史の一視点
静嘉堂所蔵松浦武四郎旧蔵資料の分析から

Study of the history of the development of humanities materials
in a modern Japanese museum.

[Analysis of the materials on the goods that were formerly possessed
by Takeshiro Matsuura and now owned by Seikado.]

内川 隆志

Takashi UCHIKAWA

【研究ノート】

近代博物館における人文資料形成史の一視点 静嘉堂所蔵松浦武四郎旧蔵資料の分析から

Study of the history of the development of humanities materials
in a modern Japanese museum.

[Analysis of the materials on the goods that were formerly possessed
by Takeshiro Matsuura and now owned by Seikado.]

内川 隆志[※]

Takashi UCHIKAWA

1. 研究の背景と目的

公益財団法人静嘉堂に収蔵されている松浦武四郎蒐集古物は、幕末から明治にかけての北方探検家、松浦武四郎(1818-1888)が、主に明治3(1870)年に北海道開拓使判官を辞して以降蒐集した考古・工芸品を含む古物コレクションである。このうち考古資料の幾つかは、武四郎の自書『撥雲餘興』首巻(明治10年刊)、第二集(明治15年刊)に所収されており、来歴、出土地、採集地の特定が可能である。『撥雲餘興』を読解した吉田武三は「この大著に収められた珍器逸品が、現在どうなっているかは筆者は、仄聞も目認もしていない」とあることからこれまでほとんど世に周知されていないコレクションであったことが理解できよう^①。本コレクションは、三菱第2代社長岩崎彌之助(1885-1893)が松浦家との交友の中で運良く静嘉堂に収まり、戦火、震災を免れ、散逸の



写真1 松浦武四郎(松浦武四郎記念館蔵)

憂き目に遭わなかった奇跡のコレクションである。幕末から明治前半期に遡る市井の蒐集家によるコレクションが当時の状態を保って現存する例は他に類を見ず、極めて貴重な資料と言えるものである。静嘉堂では、これまでに百万塔など一部の資料について研究されたことはあった^②が、残る多数の考古、工芸資料については人目に触れず厳重に管理された状況が続いていたのである。

※國學院大學学術資料センター

原稿受理日：平成26年6月16日

筆者は、縁あって静嘉堂と協議させて頂き、日本学術振興会科学研究費基盤研究C（一般）の助成を得、平成22（2010）年～平成24（2012）年の3ヶ年に亘って本コレクションの基礎調査に着手することができた。その成果として、平成24年3月に『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』³⁾を刊行、平成25（2013）年9月には静嘉堂文庫美術館において「静嘉堂蔵 松浦武四郎コレクション」展を開催、その全容を世に示すことができたのである⁴⁾。これも一重に静嘉堂文庫長中根千枝先生をはじめ静嘉堂関係諸氏のご理解と全面的なご協力あつてのことであつた。

本稿は、幕末から明治に至る国家の転換期に吹き荒れた廃仏毀釈に代表される日本美術受難の時代に、好古の世界に身を置いていた松浦武四郎が同好の徒とのネットワークを築いて古物と関わり、近代博物館や文化財保護政策の黎明期にどのような立場で関わったのかという点について本コレクションをとりまく史資料の分析を通して具体的に明らかにするものである。

2. 静嘉堂所蔵松浦武四郎蒐集古物について

筆者らが『静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎蒐集古物目録』で明らかにしたように、静嘉堂文庫に収蔵されるコレクションは、総数823点を数え、箱1「馬角 / 奇彩千秋 / 靈光萬古」、箱2「土華剥蝕 / 天地含章 / 朱翠鮮新」、箱3「東至宝 / 皇和宝銅 / 千古觀光」、箱4「寵仙」、箱5「大雄小窟」と墨書された5つの箱に収納されている古物、単独の箱に収納されている古物、箱無し状態で保存されている古物に分けることができる。箱の素材は、杉材や桐材であり、外板は板目あるいは柃目材を組接ぎし、中を仕切って引出や棚を設けている。引出や棚には、桐・杉・桑材等を素材とした小箱に防虫香を入れて保存された古物が当時のままの状態で収められている。

箱1「馬角 / 奇彩千秋 / 靈光萬古」(写真2-1)は、正面中央に墨書で「馬角 / 奇彩千秋 / 靈光萬古」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「第百五十八号 / 勾玉 / 各種」と記され、蓋裏には勝海舟(1823-1899)、小野湖山(181-1910)の揮毫による「明治庚辰仲冬為 / 北海翁之属 / 海舟散人(〔勝海舟〕) [印] [印] / 湖山醉翁長愿(〔小野湖山〕) 題 [印] [印]」が記される。上段の引出には、正面右端に「神世 / 瓊瑤」後ろ側面には、書家松田雪柯(1823-1881)による墨書「明治十三年庚辰 / 十二月二十八日為 / 北海老先生題 松元修如鶴氏(〔松田雪柯〕)」が施される。下段の引出には、正面右端に「まか玉・くたゝま」後部側面には、茶人三田葆光(-1881)の揮毫「平葆光(〔三田葆光〕) 書」が認められ、中には、武四郎唯一の肖像写真(明治15年撮影)に写る「大首飾」や明治9(1876)年に日向佐土原11代藩主島津忠寛(1828-1896)より購入した琅玕翡翠勾玉など、主に玉類を中心に収納されている。勾玉入りの蒔絵鏡筒が収められる仕覆は、河鍋曉斎(1831-1889)の手による「武四郎涅槃図」⁵⁾の樹上に描かれる。箱書の「馬角」は、武四郎の雅号、「奇彩千秋」とは永年かかって蒐めた珍しい彩り、「靈光萬古」とは遠い昔から靈妙な光を発するもの(古代の玉)という意味であろう。

箱2「土華剥蝕 / 天地含章 / 朱翠鮮新」(写真2-2)は、正面中央には墨書で「土華剥蝕 / 天地含章 / 朱翠鮮新」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「銅五十四号 / 天地含章 / 古鏡類入」蓋裏には「明治庚辰長至後三日為 / 北海翁雅属古梅巖谷修(〔巖谷一六〕) 題 (印) [印]」

光緒六年冬日河凍為 北海翁題 楊守敬(〔楊守敬〕) [印]とあり、巖谷一六(1834-1905)と明治13(1880)年に駐日公使何如璋の随員として日本に渡来した清の学者楊守敬(1839-1915)による揮毫、捺印が施される。上段の引出正面右端に「六鈴鑑 / 九獅鍊鑑 / 鞞帶鑑 / 黄楊不凶章」後ろ側面には、書家市河万庵(1838-1907)による揮毫「万菴兼(〔市河万庵〕)書」が施され、右手の引出正面右端に「銅章威」、後部側面には、松田雪柯による揮毫「明治十三季庚辰十二/月題松元修如鶴氏(〔松田雪柯〕) / [印] [印]」が施される。下段の引出正面右端に「大刀頭 / 軹 / 戈」後ろ側面には、木村二梅(生没年不詳)による揮毫「大刀頭軹戈五字 / 二梅(〔木村二梅〕)題 [印]」が施される。本来最上段には引出があり、その前板に部材のみが残存しており前面には墨書で「長 / 宜 / 子 / 孫」、裏面には、楊守敬(1839-1915)による墨書「光緒 / 庚辰 / 長至 / 後三日為 / 北海 / 題 / 守敬(〔楊守敬〕) [印] [印]」が認められる。中には、中国や古代ローマの青銅器、コイン、古墳時代の六鈴鏡や和鏡等10点が収められる。大きく箱書された「天地含章」は世界の兵器を、「土壘剥蝕」とは朽ち果てた土の華すなわち土中から発見される考古遺物、「朱翠鮮新」は銅器に生じた錆の色合を指すものと推定される。

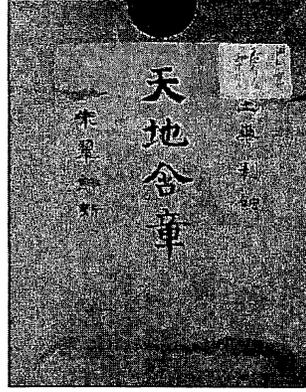
箱3「東至宝 / 皇和宝銅 / 千古觀光」(写真2-3)は、正面中央には墨書で「日東至宝 / 皇和宝銅 / 千古觀光」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「銅五十五号 / 皇和宝銅 / 古鈴類入」と記されている。蓋裏には、日下部鳴鶴(1838-1922)、永井盤谷(生没年不詳)、楊守敬による揮毫「明治辛巳春二月十六日 / 北海老人囑題東作(〔日下部鳴鶴〕) [印] [印] / 辛巳秋八月下澣 / 盤谷樵者永井喜暉(〔永井盤谷〕)題 [印] [印] / 光緒辛巳觀 / 北海翁所 / 藏日本古銅器数十事 / 当為木瀛好古之最 / 荆南楊守敬(〔楊守敬〕)記之」が認められる。中には、古墳時代の鈴杏葉や八角鈴などの鈴にまつわる青銅器を中心に、古墳時代の石製模造品の履、アメリカやフランスの新石器時代の石器など33点が収められる。箱書きの「日東至宝」は日本の至宝を指し、「皇和宝銅」は、日本の銅製品の宝物、「千古觀光」とは遠い昔を見てまわるという意味に解せよう。

箱4「籠仙」(写真2-4)は、正面中央に墨書で「籠仙」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「第百八十一号 / 石器類 / 各種」と記され蓋裏には小野湖山(1814-1910)によって「明治壬午冬至後一日 / 湖山老人長愿(〔小野湖山〕)題 / [印] [印]」が揮毫される。中には古墳時代の石製腕飾類や縄文時代の石器類、柘など17点が収められる。「籠仙」の語意は解せないものの「籠」語彙からして特別に大切なものが収められていたものと推定される。

箱5「大雄小窟」(写真2-5)は、正面中央には、山岡鉄舟(1836-1888)の揮毫で「明治十五年二月十九日 / 大雄小窟 / 鉄舟居士(〔山岡鉄舟〕)書 [印]」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「第百七十二号 / 仏躰 / 各種」と記される。中には仏像や泥塔などの仏教美術関連資料や人形関係のコレクション34点が収められ、頼朝坊仏、石仏、磚仏、木造地藏菩薩立像、真鍮仏、古代エジプトのシャプティ、木造聖徳太子像、木造武者坐像、土人形の猿田彦大明神像や宇原女塑像は、「武四郎涅槃図」の案上に描かれる。「大雄小窟」とは、大雄(マハービーラ)は「偉大な英雄」の尊称で、小窟は小さな岩屋即ち箱を岩屋に見立てた偉大な英雄(仏像や人形類)



1



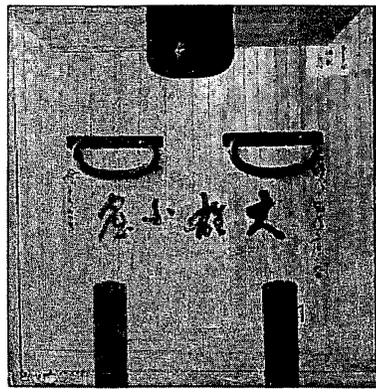
2



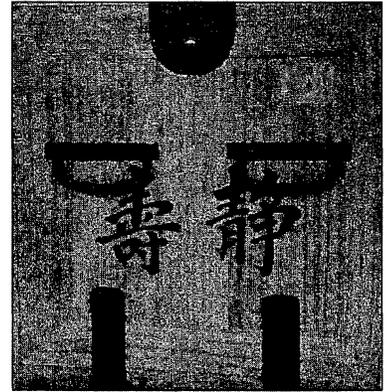
3



4



5



4「龍仙」

1「馬角/ 奇彩千秋/ 靈光萬古」

法量 縦38.8 cm 横36.2 cm 幅21.2 cm

主に大首飾など、勾玉、管玉などの玉類を収納する。

2「土華剝蝕/ 天地含章/ 朱翠鮮新」

法量 縦35.9 cm 横28.6 cm 幅27.6 cm

鏡や武具など青銅製品を中心に収納する。

3「日東至宝/ 皇和宝銅/ 千古觀光」

法量 縦44.4 cm 横39.1 cm 幅30.0 cm

青銅製の鈴類や石製品などの考古遺物を収納する。

法量 縦47.0 cm 横20.6 cm 幅41.0 cm
鍬形石や石釧、枡を収納する。

5「大雄小窟」

法量 縦43.8 cm 横42.5 cm 幅33.5 cm

木彫仏や傳仏などの仏像類を中心に収納する。

6「静壽」

法量 縦36.8 cm 横36.2 cm 幅27.2 cm

主に硯や墨などの文房具を収納する。

写真2 松浦武四郎コレクション収納箱

の住居を意味するものと思われる。

単独の箱に収納されている古物は、23 件 36 点、箱無し状態で保存されている古物は 6 点を数える。考古遺物を中心に百万塔をはじめとした仏教美術や青銅器、鉄器などが含まれる。

さらに加えて平成 25 年に追確認された古物は、現時点で 25 件を数え、「静壽」(写真 2-6)と墨書される木箱と個々の収納箱に入れられているものがある。

収納箱名称	資料名称	員数	備考
		箱番	《箱蓋表》/〔付箋〕「第百五十八号/勾玉/各種」/奇彩千秋/馬角/瑩光万古 《箱蓋表》明治庚辰仲冬為/北海翁之風/海舟散人(〔勝海舟〕) [印] [印]/湖山醉翁長恩(〔小野湖山〕)題 [印] [印]
奇彩千秋/馬角/瑩光万古	大首飾	243	「松浦武四郎肖像写真」、「武四郎涅槃圖」に掲載。弥生時代-近代
	玉一連	96	古墳時代
	切子玉	10	古墳時代
	切子玉	10	古墳時代
	ガラス小玉	96	古墳時代
	土製丸玉	85	時代不詳
	硬玉勾玉一連	53	硬玉勾玉10点他、切子玉、ガラス小玉等。一部『撥雲餘興』首巻所載。
	大勾玉	4	何れも近世の製作。一部『撥雲餘興』首巻『日本太古石器考』所載
	石釧	1	碧玉製
	管玉	2	箱蓋きに大和国布留堀出長管/美濃国赤坂堀出大管
	白玉	58	古墳時代
	三輪玉	5	古墳時代。1点は銅製の腔玉。他は水晶製。
	石製品類	11	縄文時代の垂飾、古墳時代の石製模造品、勾玉、平玉、銀環等
	石製品類	17	古墳時代のガラス小玉、勾玉等。
	土製丸玉	12	時代不詳
垂飾	1	縄文時代	
石製品	9	欧州-アジア 時代不詳。『撥雲餘興』二集所載。	
ビーズ	7	ファイアンス製。エジプト	
装飾品	9	近世。	
		箱番	《箱蓋表》/〔付箋〕「銅五十四号/天地含章/古鏡類入」/土華剝蝕/天地含章/朱翠鮮新 《箱蓋表》明治庚辰長至三日為/北海翁雅風/古梅巖谷修(〔巖谷一六〕)題/〔印〕 [印]/光緒六年冬日河津為/北海翁題/楊守敬(〔楊守敬〕) [印]
土華剝蝕/天地含章/朱翠鮮新	六鈴狀形鏡	1	古墳時代。『撥雲餘興』二集所載。
	八稜鏡	1	室町時代。
	凝淚式鏡内区	1	室町時代。
	菊花・桐紋散鏡	1	安土桃山時代
	鳥型柄頭	1	青銅製。中国古代。
	斧	1	春秋戰國時代
	車軸金具	1	春秋戰國時代
	戈	1	春秋戰國時代
	青銅製鏡	1	ローマ時代
	ローマ、ディオクレディヌス帝アントニアヌス貨	1	286年発行
		箱番	《箱蓋表》/〔付箋〕「銅五十五号/皇和宝銅/古鏡類入」/日東至宝/皇和宝銅/千古觀光 《箱蓋表》明治辛巳春二月十六日/北海老人颯題東作(〔日下部鳴鶴〕) [印] [印] /辛巳秋八月下澗/盤谷権者永井喜暉(〔永井盤谷〕)題 [印] [印]/光緒辛巳載 北海翁所/藏日本古銅器數十事/当為木瀛好古之叟/荆南楊守敬(〔楊守敬〕)記之
日東至宝/皇和宝銅/千古觀光	履	2	古墳時代。河内国志紀郡澤田村所出とあり。『東京人類學雜誌』第20号所載
	鉄地金銅貼鏡狀鏡板	1	古墳時代。
	鉄地金銅貼鏡	1	古墳時代。
	鈴杏葉	1	古墳時代。『撥雲餘興』首巻所載
	鉄鏡?	1	『撥雲餘興』二集所載。鈎物鉄蓋。
	石器	9	石鏃、石斧。アメリカ、フランス
	三稜鈴	1	古墳時代。
	五鈴鏡板付樽	1	古墳時代。『撥雲餘興』首巻所載。『尚古図録』所載
	三鈴杏葉	1	古墳時代。『撥雲餘興』首巻所載。
	五鈴杏葉	1	古墳時代。『撥雲餘興』二集所載。
	六鈴釧	1	古墳時代。
	鬼面鈴	1	時代不詳。『撥雲餘興』二集所載。
	桃形鈴	1	江戸時代。
	鉄錠前	3	江戸時代。
	鉄錠	1	江戸時代。
	鉄鈴	1	江戸時代。
土製品	4	時代不詳。『撥雲餘興』二集所載。大和国竹内村出土とあり。	
八角形鈴	1	古墳時代。『撥雲餘興』首巻所載。伊勢国三重郡泊村字田の山所掘得之古鈴	
八角形鈴	1	古墳時代。『撥雲餘興』二集所載。《箱蓋表》/勢州三重郡泊郷農/民掘地獲之古鈴	
		箱番	《箱蓋表》/〔付箋〕「第百八十一号/石器類/各種」/龍仙 午冬至後一日/湖山老人長恩(〔小野湖山〕)題/ [印] [印]
龍仙	鏡形石	1	古墳時代。『撥雲餘興』首巻、『日本太古石器考』所載。
	石釧	5	古墳時代。『撥雲餘興』二集所載。
	車輪石	3	古墳時代。『撥雲餘興』二集所載。貞享五戊辰年三月十二日/久慈郡馬場村ニ於テ稻荷塚ヨリ/掘出之器/八坂瓊御統珠とあり。
	不明石製品	1	古墳時代。『撥雲餘興』二集所載。貞享五戊辰年三月十二日/久慈郡馬場村ニ於テ稻荷塚ヨリ/掘出之器/八坂瓊御統珠とあり。

表1 静嘉堂所蔵松浦武四郎蒐集古物一覽(1)

車軸

須惠器*	1	古墳時代。
須惠器枕	1	古墳時代。《箱蓋表》/河内国錦部郡千塚堀出/陶枕
須惠器坏蓋	1	古墳時代。《箱蓋表》/河内国八尾堀出/曲玉壺
須惠器坏身	1	古墳時代。《箱蓋表》/河内国八尾堀出/曲玉壺
須惠器坏蓋	1	古墳時代。《箱蓋表》/肥後熊本/北岡堀出/土器二/矢の根/松浦氏藏
須惠器坏身	1	古墳時代。《箱蓋表》/肥後熊本/北岡堀出/土器二/矢の根/松浦氏藏
鉄鏃	2	古墳時代。《箱蓋表》/肥後熊本/北岡堀出/土器二/矢の根/松浦氏藏
瓦瓶	1	平安時代。《箱蓋表》近江国滋賀旧土堀出/磁瓶
須惠器坏身	1	平安時代。
百万塔	4	奈良時代。
陀羅尼經	4	奈良時代。
泥塔	2	平安時代。『撥雲餘興』二集所載。《箱蓋裏 武四郎笈》大/大和国式下郡宮古村堀出/小/大和国広瀬郡箸尾村/葺中ヨリ堀出之其数千/余枚或云三十九枚ト云時/明治十二年七月
泥塔	2	平安時代。《箱蓋裏》/近江国栗太郡石居村/字有原寺ト云フ耕地ヨリ堀出/出ストコロノ二千有ノ一ナリ/但旧此地ニ有原寺ト云フ/寺アリシガ天平勝宝ノ頃/兵燹ニ罹リ再建スルコト能ハサルカ故ニ土中ニ埋メ/シト云フ/明治十五年十一月廿有九日/斎藤真男藏
埴仏	1	鎌倉時代?《箱蓋裏》/河内国常楽寺瓦仏/依/皇極天皇御願而壇下之人/被奉埋納数万驅此其一/驅也/明治十二年八月/中井兼之(〔中井敏所〕)拜題
瓦経	1	平安時代。《箱蓋裏》/勢州度会郡菩提山/神宮寺境内堀出/庚辰五月中西弘綱所惠/万庵兼(〔市河万庵〕)書〔印〕
鉄製懸仏	1	室町時代。《箱蓋裏》/上野国伊香保神鉢 明治二年於神地/堀出之/火産靈神/壇安姫神/延喜比之物敷/内舍人穂積之真年
白瓷系陶器坏	3	平安時代。《箱蓋表》/三河国渥美郡/大津神分阪上所/堀出
かわらけ皿	1	江戸時代。《箱蓋表》/加茂社/あふひ皿 一枚/ひらか 一枚
かわらけ台付皿	1	江戸時代。
土製模造品	1	時代不詳。《箱蓋裏》/奥州郡山駅/新開地堀出/明治己卯冬日/修斎書〔印〕
土師質壺	1	時代不詳。
琥珀玉	1	古墳時代。
石製狛犬	1	時代不詳。《箱蓋表》/春日山堀出/鳥頭一箇/春日山堀出/狛犬一箇/多気志倭藏
獅子頭	1	時代不詳。《箱蓋表》/木鬼面 和州久米寺仙/人堂梁端之殿/飾也養老年中/造焉 三島書〔印〕/奉時堂藏〔印〕
版木	2	江戸時代。
梵字銘鏡	1	高麗時代。《箱蓋表》 感神院宝帳鏡 / 祇園社/感神院宝帳鏡/松浦氏奔藏
鉄鉢	1	滑。『撥雲餘興』二集所載。
田村將軍像	1	江戸時代。《付箋》「彫十五號/木彫/田村將軍像/小儒巻物記別首入」
柿ノ本人磨座像	1	江戸時代。《付箋》「彫十三號/木彫/人丸大明神/頓阿作」
柿ノ本人磨座像	1	江戸時代。《付箋》「彫十四號/木彫/人丸大明神/為家作」
僧照正座像	1	江戸時代。《箱蓋表》頓阿法師作/僧正遍照
西行法師座像	1	江戸時代。《付箋》彫十號/木彫/西行法師像/頓阿作
西行法師立像	1	江戸時代。《付箋》彫十一號/木彫/西行法師立像/雜司ヶ谷西行堂旧藏
古銅老猿面	1	江戸時代。《箱蓋裏》書丙子小宮前湖山道人題 (印) (印)
方格規矩八禽銘帶鏡	1	前漢末。《箱蓋表》新莽爰亘子孫鑑 竹庵所藏
斗	1	漢。『撥雲餘興』首卷所載。
雷紋龍耳敦	1	春秋戰國。
燧斗	1	漢。『撥雲餘興』首卷所載。
獸耳壺	1	漢。『撥雲餘興』二集所載。
綉紋龍耳器	1	漢。『撥雲餘興』二集所載。
兎觥蓋	1	滑。『撥雲餘興』首卷所載。
興福寺瓦硯	1	鎌倉時代。《付箋》「興福寺瓦硯 (印) (印)」
瓦硯	1	鎌倉時代?《付箋》「泉州石/敬月硯/東鑑所載字治合戦之時属官軍/自承久年至文政四年凡 (朱印) /六百卅年/清水寺僧/敬月手造」

表 1 静嘉堂所蔵松浦武四郎蒐集古物一覽 (3)

箱 6「静壽」(写真 2-6)には、主に硯や墨筆といった文房具類 8 点が収められており、箱蓋裏書きには川田甕江(1830-1896)の揮毫によって「松浦翁収蔵古研/ 尚邦産而不尚異/ 産比雖瑣事可以/ 見其用意之厚矣/ 明治壬午冬甕江老漁(川田甕江) 劄題」、白紙の付箋には「文百三十七號/ 静壽/ 硯墨類」(印) (印)」と記される。「静壽」は『論語』雍也第 6・143「子曰、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。」の仁者の好む「静壽」を意味するものと思われる。個々の資料で注目すべきは、『撥雲餘興』首巻に木版多色刷りで巻頭を飾る田村將軍像(写真 3)⁶⁾である。田村將軍像は、唐木の重厚な観音開きの厨子に収められており武四郎愛蔵の状況がみて取れる。像には『田村將軍記』一卷が付され、東坊城聡長(1800-1861)の題詞「外攘内緝」と、湘雲(人物不詳)による田村將軍図に続いて、牧善輔(1801-1863)、巖垣六蔵(1808-1873)、家長韜庵(1809-1866)、頼三樹三郎(1825-1859)、桑原鷲峰(1819-1866)、奥野小山(1800-1858)、鷲津宣光(1825-1882)、小野湖山(1814-1910)、浅野長祚(1816-1880)の讚が記される。『撥雲餘興』首巻に所載される「田村將軍木像記」には、牧善輔(嘉永 7(1854)年 9 月付)と頼三樹三郎(安政 2(1855)年 2 月付)による「阪上將軍木像記」を明治 9(1876)年 5 月「下瀬」付けで市河万庵(1838-1907)が清書し、明治 8(1875)年「天長節付」で鷲津宣光による「坂上公像記」を関思敬(1827-1877)が清書する。明治 8 年 11 月、武四郎は田村將軍像蒐集の経緯について記している。これに基づいて整理すると、もとは浅野長祚(1816-1880)が京都町奉行書の在職中に骨董舗から需め、著名な学者に「文作ラセ」一卷にまとめて、木像と共に江戸に持ち帰ったものを、江戸の幕臣松平忠敏(1818-1882)の邸宅で初見し「一度拝セシヨリ片時モ忘難カ」と執着し続け、明治 7(1874)年 5 月 24 日に安藤龍洲(生没年不詳)を介して持ち主の浅野長祚から本像を入手したことが記されている。『田村將軍記』に讚を寄せている人物の内、明治 8 年「天長節」に記す鷲津宣光と明治 10 年 2 月初 5 日に記す小野湖山と元所有者の浅野長祚の讚は、武四郎が入手した後追加したものであることがわかる。

田村將軍像の他にも「武四郎涅槃図」に描かれた「頓阿法師作」と箱書きされる僧照偏正像の他に西行法師立像など「武四郎涅槃図」の案上に配置される木像が確認できる。頓阿法師(1289-1371)とは、浄弁・兼好・慶運とともに二条為世門の和歌四天王と称された和歌三神の一人に数えられる。頓阿法師が崇敬する摂津国一宮住吉大社に、長さ 5 寸 5 分の数百体の柿本人麻呂像を彫り奉納したと伝えられている。現在は京都知恩院や松平定信編『集古十種』(古画肖像三の部)に「柿本人磨像陸奥國白川鹿嶋社蔵」として所収される白河市歴史民俗資料館蔵資料⁷⁾ほか、全国で数体が確認されている。頓阿法師作とされる西行法師座像も認められるが、「武四郎涅槃図」に描かれた西行法師座像は、為家作のそれに近いことが見て取れる。何れも 18 世紀前半頃の製作であろう⁸⁾。

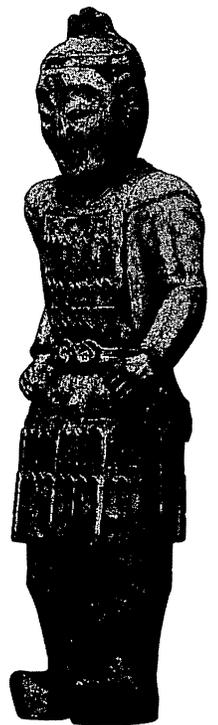


写真 3 田村將軍像

また、『撥雲餘興』首巻・二集に所載される鏡を含む青銅器類 8 点が確認できる。青銅器類の多くは所謂「支那箱」に収められていることから、それらが中国から直接もたらされた事を物語っている。時代的には春秋戦国時代から六朝にかけてのものが認められるが、大半は緑青を落とし蠟が塗布されていることから年代判定に困難をきたしている。わが国における古代中国の青銅器蒐集家として江戸時代後期の書家市河米庵(1779-1858)を嚆矢として、その後続くのは、煎茶道具として蒐集を開始した住友吉左衛門友純(1864-1926)であり、明治 29(1896)年以降の時期となる⁹⁾ため、これらの青銅器は江戸後期から明治初年に日本に入った一群といえる。蠟の塗布は乾隆帝(1735-1796)以降の趣味であり、錆化防止と同時に倣古青銅器に関しては古代の青銅器と質感を同じくする狙いがあったものと言われている。これらの銅器のうち失蠟法で製作されている兕觥の蓋などは、明らかに清代の倣古青銅器であることが理解できる。

3. 松浦武四郎の古物蒐集

さて、本コレクションを遺した松浦武四郎の略歴と古物蒐集の実態について見てみよう。「北海道」の名付け親として知られる松浦武四郎(1818-1888)は、文化 15(1818)年 2 月 6 日、和歌山藩領の伊勢国一志郡須川村(現三重県松阪市小野江)に郷土松浦桂介の 4 男として生まれた。満 6 歳で俳句を詠み、7 歳からは自宅にほど近い真覚寺の来応和尚から読み書きを習い「名所図会」を愛読した。12 歳から津藩の儒者である平松楽斎(1792-1852)の私塾で学び、満 15 歳で江戸に家出した後、16 歳から 26 歳に至る 10 年を諸国遍歴に費やした。長崎で津川蝶園(生没不詳)よりロシアの南下を耳にして以来、その眼差しは蝦夷地に注がれ、弘化元(1844)年より彼の地を目指し、翌弘化 2(1845)年志を果たしたのである。その後、私人として 3 回、安政 2(1855)年には蝦夷地御用御雇入の命を受け、幕府雇いとして安政 3(1856)年から安政 5(1858)年にかけて 3 回の蝦夷地調査を敢行、嘉永 3(1850)年の『初航蝦夷日誌』全 12 冊を皮切りに蝦夷地を紹介する 151 冊に及ぶ多数の紀行類を出版するなど、名実共に武四郎の名は広く世に知られたのである。中でも安政 5(1859)年に刊行された『東西蝦夷山川地理取調図』28 巻は、279 名に及ぶアイヌ民族の協力を得て、蝦夷地の内陸までくまなく踏査した地勢図で、後の北海道の国郡名選定に反映されるなどその価値は高く評価されている。同年アイヌ民族の窮状を克明に記録した『近世蝦夷人物誌』を上梓するも箱(函)館奉行所はその出版を許可しなかった。明治 2(1869)年 3 月には、政府から正式に蝦夷開拓御用掛、8 月には開拓判官を拝命し従五位に叙せられ開拓大主典の要職に就くも、翌明治 3(1870)年 3 月には利権を手放さない政府関係者への不満と開拓使内部の腐敗を理由に職を辞し開拓判官を免官し従五位を返上したが、その功績ゆえ終身 15 人扶持を与えられた。後の人生は、少年期より興味を注いできた古物蒐集に没頭し、数多の好古家達との交流をもって蒐集と研究に明け暮れたのである。『撥雲餘興』首巻(明治 10 年刊行)、『撥雲餘興』二集(明治 15 年刊行)の 2 著は、その集大成と言える。

好古趣味の萌芽

天保3(1832)年8月武四郎満14歳の年に開催された伊勢国射和村(現松阪市射和町)の延命寺で京都の本草家山本亡羊(1778-1859)主催の物産会に、師の平松楽齋と共に「紅毛銭 二種」(紅毛銭とは欧州の銭貨のこ)を出品。同年、本居宣長(1730-1801)が蒐集した鈴を写した図を長谷川元貞(1796-1858)から借りて書写し、「古鈴図」(写真4)を著すなど既に古物好みの片鱗が見て取れる。



写真4 「古鈴図」部分(松浦武四郎記念館蔵)

極めつきは、武四郎が古物購入の返済に困り(松浦武四郎記念館には、天保3年時に武四郎が購入した物品の請求書が残っている)であろうことか師の松平楽齋が大切にしていた火事頭巾を勝手に持ち出し、道具屋に売却してしまう事件を起こしている。これは天保4(1833)年に15歳で家を飛び出したきっかけとなったとされている。このように、そもそも武四郎は、生来「蒐集」の人である。満14歳で記録した「古鈴図」をみても、モノへの執着と物事を徹底的に記録するという性分がすでに充分に感じられるのである。それは、後の仕事をみても顕かなように具体的なモノや見聞した事柄、描いた風景もまた蒐集の対象であったといえる。19歳で記した『社寺覚書』や天保14(1843)年、25歳の年に諸国の歴訪から郷里に戻った際に記した『西海雑誌』、翌弘化元(1844)年の『四国遍路道中雑誌』などの版本は、後に出版される数多の著作と同じく、図解を存分に混え詳細を究めたものである。見聞や写生記録を形にするため終生武四郎が持ち歩いた「野帳」と呼ばれる取材ノートが彼の記録媒体である。このような点から、生来の癖である武四郎の「蒐集」はすでに自我の芽生える少年時代からはじまり、終生変わることはなかったのである。つまり、開拓判官を辞し市井に下ってから大きく方向転換したように見えるが、主な蒐集アイテムが「コト」から「モノ」に変換され、過去を顧みることを抗うように蝦夷地以外の「モノ」の世界に没頭していったのである。

大学南校物産会・文部省博覧会への出品

明治3年に武四郎が開拓判官を免官し、本格的に好古家の道を歩み出した当時の動向を政府の博覧会政策と連動して見てみよう。

大学南校に置かれた物産局では、明治4(1871)年に、九段坂上の旧幕府三番薬園地に博物館建設の計画が持ち上がり、すでにこの時点で新たに南校の土地となった場所に、博物館建設の計画があったことが記録されている。

明治四年辛未二月三日

一、九段坂上三番菜園地、大学南校御用地として東京府より請取候事、但追て博物館建設之積に候事 (太政類典)

わが国の博覧会の濫觴ともなった南校主催の物産会も博物館建設計画直後からあり、明治4(1871)年5月14日から7日間にわたり九段の招魂社(現靖国神社)の祭礼に合わせて大学南校物産会として開催されたのである。当初は大学南校博物館の名で「物産会」ではなく「博覧会」として開催する計画であったが、明治4(1871)年2月に大学から太政官弁官宛てに博覧会開催伺を提出している。

大学伺弁官記九段坂上兵部省地内并今度東京府ヨリ南校へ受取候、元三番園ニテ、別冊ノ仕組ヲ以テ博覧会相催シ度、尤兵部省へハ談判済ニ有之候間、此段相伺候也四年二月大蔵(ママ)可口(朱書)伺ノ通事四年二月廿九日 (太政類典)

さらに、3月2日には大学南校が博覧会の具体的な趣旨等について以下のとおりの内容で弁官に上申している。

大学南校上申 弁官宛先頃申上伺済相成候博覧会ニ付ケ条書ノ内第三条増補イタシ候間別紙相添此段申上置候也四年三月二日大学追テ御達ノ切手雛形写差出申候也博覧会大旨并切手雛形 博覧会ノ主意ハ宇内ノ産物ヲ一場ニ蒐集シテ其名称ヲ正シ、其有用ヲ弁ジ、或ハ以テ博識ノ資トナシ、或ハ以テ証徴ノ用ニ供シ、人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ、寡聞固陋ノ弊ヲ除カントスルニアリ、然レドモ皇国従来此挙アラザルニヨリ、其物品モ亦随テ豊贍ナラズ。故ニ今者此会ヲ創設シテ百聞ヲ一見ニ易ヘシメント欲スルトイヘドモ、顧ミルニ隆盛ノ挙ニ至ツテハ、之ヲ異日ニ待サルヲ得サルモノアリ、因テ姑ク現今官庫ノ蔵スル所及ヒ自余ノ物品若干ヲ駢列シテ暫ク人ノ来観ヲ許シ、以テ其開端トナス。

自今爾後毎歳一次、其会期ヲ定メ日ヲ遂ヒ月ヲ累ネテ、漸々宇内ノ珍品奇物ヲ網羅シ、人ヲシテ遠ク万里ノ外ニ遊フヲ用ヒス、座シテ全地球上ノ万物ヲ縦覧セシメンコトヲ期ス。

一、当今官品未タ完足セス、故ニ金石ノ属、草木ノ類ヨリ鳥獸魚介虫豸等ニイタルマデ、総テ天造ニ属セシ物、又諸器械奇品古物及ヒ漢洋舶齎ノ諸品等、総テ博識ノ資トナスヘキ人造ノ物ヲ所蔵シ展観ニ供セント欲スル有志ノ輩ハ、会前ニ之ヲ当館ニ携ヘ来ルベシ。且ツ最寄ノ物品ヲ出セシ輩ニハ褒章ヲ賜フベキ事。其出品ハ博覧会物品部類書ヲ見テ其大概ヲ知ルヘシ

一、会期ハ来ル五月五日ヨリ同月晦日マデノ間ヲ限り、展観ハ毎日朝九字ヨリ午後五字マデノ間ヲ限トス。

一、来観ノ輩ハ男女貴賤ヲ論ズルコトナシ。但シ、一時ノ雑沓ヲ防ク為メニ、南校ニ於テ予メ切手ヲ渡置ベシ。

一、持参ノ品物ハ、其持主ノ姓名ヲ記シ、之ヲ列スベシ、尤預リ証書渡シ置、会后引替、品物差戻スベシ。

一、商賈売買ノ品物、若シ贖ヒ度者アラバ売主ト談判勝手次第ナリトイヘドモ、会中ハ其品物ヲ列シ置ベシ。

辛未物産会開催の最も重要な点は、明治政府の最高学府が主導し広く国民に博覧会の持つ有用性を謳い、一般の出品を求め「最寄ノ物品」の品には賞を出すなど物品への注意を喚起したことにある。出品物の売買を認めていることも古物などに金銭的価値が厳然と存在することを知らしめ、ひいては散逸、廃棄などを回避させる意図があったことが推測できる。当初計画では、一辺が12間の八角形三階建て中庭を有し、庭には十六弁菊花の紋章を模った花園とし、屋根は瓦葺、総塗屋約1,000坪の展示面積を誇る壮大なものであったが、実際には招魂社境内の兵部省管轄の建物においてのみ行われたのである。東京国立博物館所蔵の『明治辛未物産会目録』には、部門別に出品者別に総ての品名が記されている⁽¹⁰⁾。

出品者には、武四郎と交流のあった町田久成、田中芳男、伊藤圭介、内田正雄など大学関係者が散見され、南校の収蔵品に関係者個人のもを加えて実施されたものである。その出品者の一人として武四郎の名が見える。出品物は、松浦弘の名で鑛物門化石之部に、

一石螺 北海道浦川産 鸚鵡螺一種巨大者 右松浦弘出品

古物之部に、

一雷斧砥

一雷斧鋸

一未成雷斧 右三品北海道於箱詰所堀出ニシテ松浦弘彼地遊歴ノ時 之ヲ得タリ砥ハ其石質灰色形楕円ニシテ長サー一尺五寸幅一尺一寸厚サ三寸半其面ニ縦ニ長ク凹ナル筋四条アリ是天然ニ非ス物ヲ研磨セシ痕ナリ鋸ハ薄キ平扁ナル石片ニシテ其一端ニ物ヲ研リ截ルノ用トナセシト想ハル、痕アリ雷斧ノ未ダ全成セザル者ト彼是参考シテ此石ハ皆雷斧ヲ造ルニ用シコトヲ証ス

一石罫 モンベツ石ニテ造ル者 右松浦弘出品

と明らかにされており、ここに記された石器4点の内、「雷斧鋸」と「未成雷斧」の2点が静嘉堂文庫コレクション「寵仙」に現存する(写真5)。『撥雲餘興』首巻には、

未全雷斧 / 石鋸 / 砥石 / 三品共に箱館在尻沢辺《シリサワベ》 / 村にて堀出る処なり雷斧《ライフ》は / 玉造石の劣等なるもの鋸と砥 / 石は灰白色堅剛《ケンカウ》石質あらし沙 / 水をかけて / 《ヒ》く時ハよく切れまた能 / 磨るゝ物也此法を樺太《カハフト》タコイ土人ニ審《タハス》に / さして陸ヶ敷事ならず其沙の質ニ依て / 切るにも磨も遅速有と此砥石今樺太にハ / 往々見ゆ又東地モロランなる会所のふしんの / 時も五六枚と鋸三四枚を堀出しぬ然るに此玉造 / 石の類は今北海道に見ざるに是を此地ニて作り用ひしこと不審なり是等の物出しによりては / 仁明天皇紀承和六年冬十月(乙巳)出羽国言ス / 去八月廿九日管田川郡司鮮你此郡西浜遠 / 府之程五十余里本自無レ石而従二 月三日一霖雨無 / レ止雷電闕レ声経二十五日一乃見二 晴天一時向二 海畔一自然隕 / レ石其数不レ少或似レ鋒(下略) / その後元慶八年九月廿九日また仁和元年六月廿一日出羽 / 国秋田城内に雨ス二石鏃ヲ一等のことも偶言たる事しらるへきなりと / 明治十年丑の春雷乃発声のころ弘誌 / 多氣志廬の主人の雷斧



写真5 (左) 箱4「龍仙」に収納される擦切磨製石斧(右)と石器

写真6 (右) 『撥雲餘興』首巻所載「未全雷斧・石鋸・砥石」の図

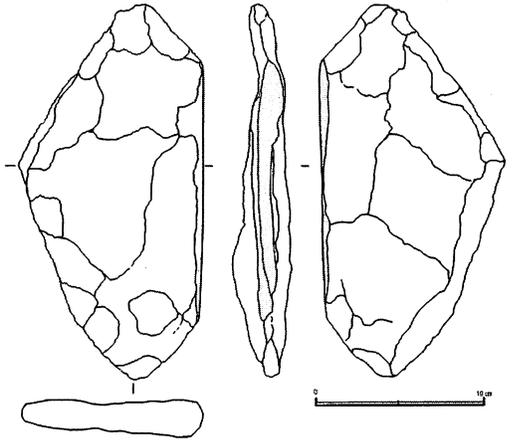


図1 石器実測図 (トーンは磨痕)

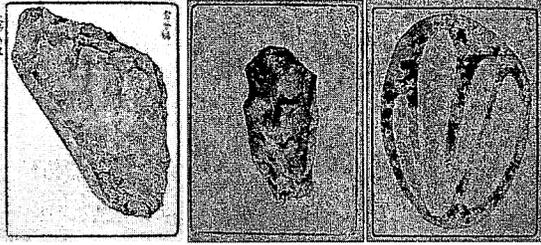


写真7 『明治四年物産会草木玉類石写真』東京国立博物館蔵

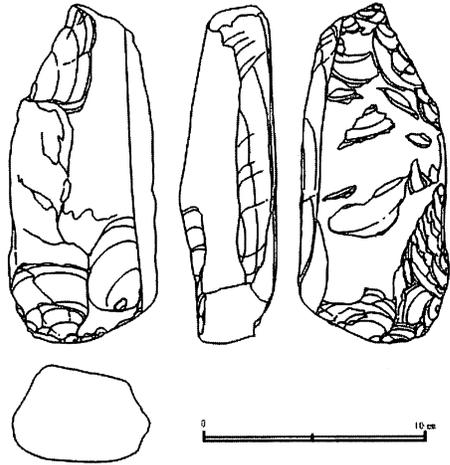


図2 擦切磨製石斧実測図

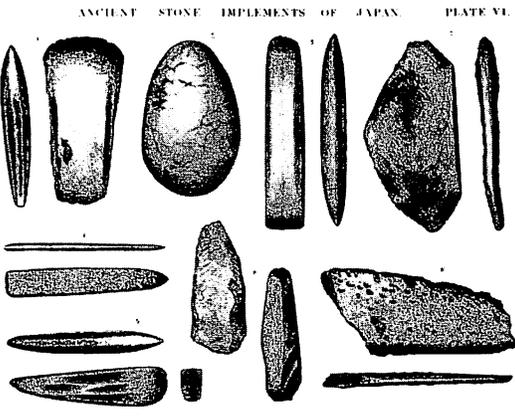


写真8 神田孝平『日本太古石器考』1885

の砥石といへるものを / 得られしを見て / 鳴神の空にていひし斧も今みらるゝ世と / 成にけるかな

と記述され「雷斧砥」を合わせ3点が図示される。また、この3点の写生図が東京国立博物館に現存する『明治四年物産会草木玉石類写真』で確認することができ、さらに、砥石を除く2点が神田孝平の『日本太古石器考』「ANCIENT STONE IMPLEMENTS OF JAPAN. PLATE VI」に掲載され、その実物が静嘉堂に残されているのである。実物は、未全雷斧が、蛇紋岩製の擦切磨製石斧で縄文時代前期の所産であり、石鋸とされる石製品は、薄く半月形に打ち欠いた側面の一部を磨いたもので縄文時代の遺物の可能性が考えられるものである。

南校物産会の出品物は、5月29日から数日吹上御所に並べて天覧に供されたことが『太政類典』に所収されている。物産会直後の明治4(1871)年5月23日太政官は「古器旧物保存の布告」を発し、「集古館設立の献言」(大学献言)に答えたが、古器旧物の価値観を定め31種の名称一覧が添えられ、品名と所蔵者を記載したものを所管官庁を通じて提出することを命じただけで集古館そのものの建設には触れられなかったのである。

御布告古器旧物ノ類ハ古今時勢之変遷制度風俗ノ沿革ヲ考証シ候為メ其裨益不少候処自然厭旧競新候流弊ヨリ追々遺失毀壞ニ及ヒ候テハ実ニ可憐事ニ候条各地方ニ於テ歴世蔵貯致シ居候古器旧物類別紙品目ノ通細大ヲ不論厚ク保全可致事

但品目並ニ所蔵人名委詳記載シ其官庁ヨリ可差出事

(別紙)

- 一 祭器ノ部 神祭ニ用ル楯矛其他諸器物等
- 一 古玉宝石ノ部 曲玉 管玉 瑠璃 水晶等ノ類
- 一 石弩雷斧ノ部 石弩 雷斧 霹靂礎 石剣 天狗ノ飯匙等
- 一 古鏡古鈴ノ部 古鏡 青鈴等
- 一 銅器ノ部 鼎爵其他諸銅器類
- 一 古瓦ノ部 名物並名物ナラスト雖古キ品
- 一 武器ノ部 刀剣 弓矢 旌旗 甲冑 馬具 戈戟 大小 銃砲 驛丸 戦鼓 唃囉等
- 一 古書画ノ部 名物 肖像 掛幅 卷軸 手鑑等
- 一 古書籍並古経文ノ部 温古ノ書籍図画及古版古写本其他戯作ノ類ト雖モ中古以前ノモノニテ考古ニ属スル者等
- 一 扁額ノ部 神社仏閣之扁額並諸名家書画ノ額等
- 一 楽器ノ部 笛 笙 箏 篳篥 大鼓 鐘鼓 羯鼓 箏 和琴 琵琶 琴瑟 仮面其他猿樂装束並諸楽器歌舞ニ属スル品
- 一 鐘銘碑銘墨本ノ部 名物並名物ニアラスト雖モ古キ品
- 一 印章ノ部 古代ノ印章類
- 一 文房諸具ノ部 机案 硯 墨 筆架 硯屏ノ類
- 一 農具ノ部 古代ノ用品

- 一 工匠器械ノ部 同
 - 一 車輿ノ部 車 輿 籃輿等
 - 一 屋内諸具ノ部 屋室諸具 屏障類 燈燭類 鎖鑰類 庖厨諸具 飲含器具 煙具等
 - 一 布帛ノ類 古金襴並古代ノ布片等
 - 一 衣服裝飾ノ部 官服 常服 山民ノ服 婦女服飾 櫛簪ノ類 傘笠 雨衣 印籠 巾着 履屐之類
 - 一 皮革ノ部 各種ノ皮革並古染革ノ紋図
 - 一 貨幣ノ部 古金銀古錢並古楮幣等
 - 一 諸金製造器ノ部 銅 黄銅 赤銅 青銅 紫金 錫等ヲ以テ製造セル諸器物
 - 一 陶磁器ノ部 各国陶器磁器等
 - 一 漆器ノ部 蒔画 青貝 堆朱等ノ諸器物
 - 一 度量權衡等ノ部 秤 天平 尺 斗升 算盤等古代ノ用品
 - 一 茶器香具花器ノ部 風炉 釜 茶碗等ノ茶器 香盒 香炉等ノ香具 花瓶 花台等ノ花器類
 - 一 遊戯具ノ部 碁 将棋 雙六 蹴鞠 八道行成 投壺 揚弓 投扇 歌骨牌等
 - 一 雛幟等偶人并児玩ノ部 這子 天兒 雛人形 幟人形 木偶 土偶 奈良人形等其他児童 玩弄ノ諸器
 - 一 古仏像並仏具ノ部 仏像 経筒 五具足 宝鐸等ノ古仏具
 - 一 化石ノ部 動物ノ化石並動物ノ骨角介殻ノ類
- 右品物ハ上ハ神代ヨリ近世ニ至ル迄和品 舶齋ニ不拘

ここで注目すべきは、松浦武四郎記念館に収蔵される『蔵品目録』に記される「馬角」「天地含章」「皇和宝銅」「古銅器類」「文房具並経文類」「神仏像類」「陶器」「埴物類」「石器類」「武器類」「幅之部」「古塗物」「雑類」の13項目は、箱書等との整合性から武四郎の意図した分類基準に基づいたものと思われ、内容的には個々の箱の名称以外「古器旧物保存方」に示された古器旧物のカテゴリーのいくつかに概ねあてはまるものである。「古器旧物保存方」の31種の部どうしの関連性は不明ながら、具体的な品々が示された内容は、鈴木廣之が指摘しているように明治初期における好古家の蒐集対象そのものと言えそうである⁽¹⁾。このような観点から『蔵品目録』は、好古家の側からそのことを裏付ける貴重な史料であり、さらに静嘉堂に収蔵される松浦武四郎旧蔵古物よって『蔵品目録』に所載される物との対比が具体的に可能となった点は極めて重要である。

さて、同年陰暦7月、大学の廃止をうけて文部省が設置され9月には文部省博物館が置かれ、翌月10月1日から10日間湯島大成殿での博覧会を計画し、幹事を松浦武四郎、福田敬業、柏木政矩、長井十足、永井休三、樋口光義、市川得庵、板橋貫雄らに申し付けたことが記録されているが、この博覧会は結局開催されなかった。

明治5(1872)年陰暦2月には、翌年開催予定のウイーン万国博覧会参加に向けて太政官正院に博覧会事務局が開局され、3月10日から4月30日にかけて文部省主催の初めての博覧会が湯島聖堂大成殿で開催されることとなった。

文部省布達

博覧会ノ旨趣ハ天造人工ノ別ナク宇内ノ産物ヲ蒐葉シテ其名称ヲ正シ其用ヲ弁シ人ノ知見ヲ広ムルニ在リ、就中古器旧物ニ至テハ時勢ノ推遷制度ノ沿革ヲ追徴ス可キ要物ナルニ因リ嚮者御布告ノ意ニ原キ之ヲ羅列シテ世人ノ放觀ニ供セント欲ス然レドモ其各地ヨリ徵集スルノ期ニ至ツテハ異日ニ待タザルヲ得ズシテ現今存在ノ旧器ハ社寺ニ遺伝スル什物ノ外其用ニ充ツ可キ物少ナク加フルニ皇国従来博覧会ノ挙アラザルニ因リ珍品寄物ノ官庫ニ貯フル所亦若干許ニ過ギズ因テ古代ノ器物天造ノ奇品漢洋舶載新造創製等ヲ論セズ之ヲ蔵スル者ハ博物館ニ出シテ此ノ会ノ欠ヲ補ヒ以テ世俗ノ陋見ヲ啓キ且古今ノ同異ヲ知ラシムルノ資助ト為スヲ請フ

- 一、品物ハ二月十五日ヨリ文郡省博物館へ持出ス可ク最モ重大ノ品ハ持夫差出ス可キ事
- 一、品物受取ノ節ハ預書ヲ渡シ置キ会後ニ引替差戻ス可キ事
- 一、永久博物館ニ預ケ置キ苦シカラザル品ハ別段預リ証書渡置キ持主入用ノ節ハ何時ニテモ証書引替相渡ス可キ事
- 一、出会ノ品ハ必ず持主ノ姓名ヲ記シ之ヲ列ス可キ事
- 一、会期ハ来ル三月十日ヨリ二十日ノ間ヲ限り展觀ハ毎朝九字ヨリ午後四字ヲ限トス但シ常備ノ品ハ一六ノ日同時刻ノ間拝見相成候事
- 一、拝見ハ男女ヲ論セズ一日ニ大略千人ヲ限り拝見切手相渡間候右持參ス可キ事
- 一、切手ハ文部省博物館及諸方書林ヨリ相渡シ申ス可キ事

壬申正月 文部省 博物館

内容的には「御布告ノ意ニ原キ之ヲ羅列シテ世人ノ放觀ニ供セント欲ス」とあるように「古器旧物保存の布告」に示した器物を一般に向けて展示したいが、「各地ヨリ徵集スルノ期ニ至ツテハ異日ニ待タザルヲ得」ず、「珍品寄物ノ官庫ニ貯フル所亦若干許ニ過」ぎず、「因テ古代ノ器物天造ノ奇品漢洋舶載新造創製等ヲ論セズ之ヲ蔵スル者ハ博物館ニ出シテ此ノ会ノ欠ヲ補」ってもらいたいと記している。

出品者は御物、工部省、教部省、個人を含めて 150 余名に及び、内容的には布告を反映して鉦物、動植物など天産物の出品が抑えられ、古器旧物の採集出品に力を入れているところに特色があった。博覧会事務局関係者では、町田久成が笙鳳凰丸一管、横笛二管和琴一面の他、鈴、画像一ハ薩摩忠隆像一ハ同田中傑山像を出品。蜷川式胤が古大和鞍、雷斧、蜷川親当像など 17 件、柏木政矩（貨一郎）が雷斧、播磨国極楽寺瓦経并願文 3 件、内田正雄が油漆画額（西洋人所画）8 枚、剥製珍禽 2 件などがあげられる。以下に示したとおり武四郎の出品品として大学南校物産会に出陳した石器類 3 件と古銭類が記されている。

- 一 未成雷斧 一箇
- 一 雷斧鋸
- 一 雷斧砥

右三品北海道所堀出 一箇 右 松浦弘

一 咸豊重寶 九品 右 松浦弘

古銭廿八品 右 松浦弘

さらに明治6(1873)年に開催された文部省博覧会の松浦の出陳品として、

一 古瓦 六 松浦武四郎

一 興福寺瓦硯 一面 同

を供している。このように、武四郎は大学南校物産会から湯島大成殿、明治6年の博覧会の何れにも稀覯な古物の出陳者として一役買っていたことが理解できる。

4. 相集う好古家達

明治15(1882)年刊行の『撥雲餘興』二集に収められる「古鑑之図」解説文中に、「我が古物好ミ」は画家で有職故実にも通じていた菊池容斎(1788-1878)の「勸め」による、と記しているが前述したようにそれはきっかけにすぎない。その萌芽は、はるか少年期に遡ることは先に述べたとおりである。いつ頃から本格的に好古家との交流を始めたのかは定かではないが、明治元(1868)年12月21日から毎月21日には、自宅で「尚古会」という好古家の集まりを開いていた事実がある。先に記した明治4(1871)年の招魂社における大学南校物産会や明治5・6年の博覧会への出品などの実績からみても、町田久成など当時の文化財行政の要職にあった人物に蒐集家として一目置かれる存在であった事は間違いない。明治6年2月頃に実家に送ったと推定される書簡に、

僕無手ニ而遊び居候而、天下の名品なり古器・古書画・古銭・古金銀等をあつめ遊び居候も、
全く世の中の情を知居候間、此暮し出来候也、当時古銭は日本ニ而三人目位ニ相成候、古金銀も東京ニ而名を上げ申候

と記していることからしても、古銭蒐集家として名を挙げていたことがわかる。武四郎の古銭蒐集は古く、武四郎と親交の篤かった伊勢の豪商川喜多政明(石水)(1822-1879)家に伝わる武四郎自筆の『昌平宝鑑』(元治2(1865)年自序)や『洋貨図録』(元治2(1865)年自跋)などの自筆本からも窺える⁽¹²⁾。

彼の古物を巡る交友関係は、明治10(1877)年刊行の『撥雲餘興』首巻、明治15(1882)年刊行の『撥雲餘興』二集には、多数の文人墨客が挿絵や識を載せている。三浦泰之の分析によると主立った人物は以下の通りである⁽¹³⁾。

挿絵作者としては、河鍋暁斎(1831-1889)、市河万庵(1838-1907)、福島柳圃(1820-1889)、木村嘉平(1823-1886)、高島藍泉(1838-1885)、中島杉陰(1845-没年不詳)、柏木貨一郎(1841-1898)、渡辺小華(1835-1887)、田崎草雲(1815-1898)、青木正好(人物不詳)、秦蔵六(1823-1890)、三浦乾也(1821-1889)、鈴木香峰(1808-1885)、井上竹逸(1814-1886)、「華陽長正名」(人物不詳)

詩歌等作者としては、永井盤谷(生没年不詳)、向山黄村(1826-1897)、大槻磐溪(1801-1878)、木村二梅(慶応-明治頃)、柏木貨一郎(1841-1898)、福田鳴鷺(1817-1894)、高林五峯(1868-1947)、山本竹雲(1820-1888)、富岡鉄斎(1836-1924)、益田香遠(1836-1921)、安藤竜淵(1806-1884)、古筆了仲

(1820-1891)、加藤千浪(1810-1877)、大島堯田(1819-1885)、福田行誠(1809-1888)、南摩綱紀(1823-1909)、大槻文彦(1847-1928)、神波即山(1832-1891)、江馬天江(1825-1901)、関根痴堂(1841-1890)、伊東桂洲(生没年不詳)

入手経路等に関する記載に関しては、浅野梅堂(1816-1880)、松平忠敏(1818-1882)、柏木貨一郎(1841-1898)、「楓川子」(人物不詳)、「新宮なる水野氏」(水野忠幹(1860-1871)か)、川喜田石水

(1822-1879)、根岸武香(1839-1902)、「鉄爪子」(人物不詳、木村二梅(慶応-明治頃)、東京本所石原の「骨董舗」、近藤清石(1833-1916)、横山由清(1826-1879)、「伊勢津なる魚や某」(人物不詳)、東京浅草菊橋西の「骨董舗」、東京横山町の「玉巖堂」、京都の「西村氏」、松田雪柯(1823-1881)、横井鉄叟(生没年不詳)、志賀八十左衛門(生没年不詳)、市河万庵(1838-1907)、「友人佐々井翁」(生没年不詳)、菊池容斎(1788-1878)、畏三堂(生没年不詳)などがあげられる。

『撥雲餘興』に所載される品々の一部が収蔵される静嘉堂文庫コレクションの箱書には、交流のあった友人・知人からの揮毫があり、その主な筆者と揮毫件数を列举すると、以下の通りである。

巖谷一六(1834-1905 / 書家) 3 件、小野湖山(1814-1910 / 漢詩人) 9 件、大槻如電(1845-1931 / 文筆家) 1 件、市河万庵(1838-1907 / 書家) 15 件、岡本黄石(1811-1898 / 旧彦根藩家老・漢詩人) 1 件、勝海舟(1823-1899 / 旧幕臣) 1 件、木村二梅(生没年不詳 / 書家) 1 件、日下部鳴鶴(1838-1922 / 書家) 2 件、三田葆光(1824-1907 / 旧幕臣・歌人) 1 件、高林二峰(1819-1897 / 書家) 2 件、永井盤谷(生没年不詳 / 書家) 3 件、中井敬所(1831-1909 / 篆刻家) 11 件、益田香遠(1836-1921 / 篆刻家) 1 件、松田雪柯(1823-1881 / 旧伊勢神宮祠官・書家) 3 件、向山黄村(1826-1897 / 旧幕臣・漢詩人) 2 件、山岡鉄舟(1836-1888 / 旧幕臣) 1 件、楊守敬(1839-1915 / 清国駐日公使の随員・金石学者) 5 件、鷲津毅堂(1825-1882 / 儒学者) 1 件、渡辺小華(1835-1887 / 三河国田原藩家老・画家) 1 件と幕末期から明治前期に活動した書家、漢詩人、学者など、著名な顔ぶれが揃っていることがわかる。とりわけ、複数年にわたって登場する小野湖山とは、明治6(1873)年に東京神田五軒町の居宅を共同購入するなど、武四郎とは距離的にも近い間柄にあった。松浦武四郎記念館には武四郎が出会った人物に絵や文章を書かせた「渋団扇」147枚が残されている⁽¹⁴⁾。

武四郎は、自身の主催した「尚古会」などを軸に同好の会に度々出席し、幅広い交友関係を築いていったものと考えられる。明治8(1875)年12月6日に開催されたH.V. シーボルト

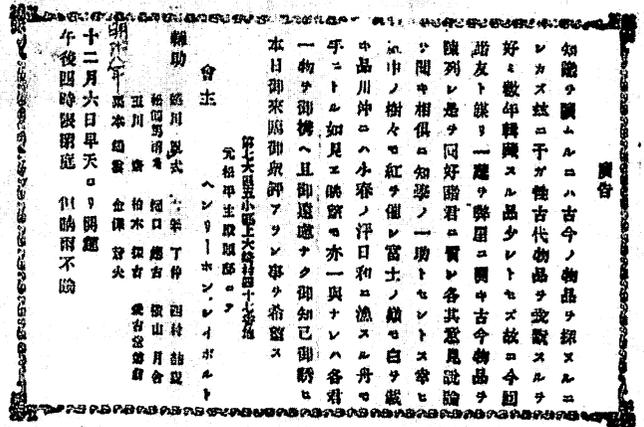


写真9 古物会の広告

(『シーボルト父子のみた日本』1996 ドイツ日本研究所編)

(1852-1908)主催の「古物会」にも参加している。H.V. シーボルトは、嘉永5(1852)年、オランダ商館医F.V. シーボルトの次男として生まれ、明治2(1869)年17歳の年に来日し、明治5(1872)年には在日オーストリア・ハンガリー公使館臨時通訳見習に採用され、ウイーン万国博覧会準備委員会から、日本政府の連絡要員として起用され、出陳品目の選定業務を担うこととなった。業務を通じ蜷川式胤(1835-1882)と知遇を得たことによって、彼と周辺の識者から日本の古典籍や古物、考古の知識を得たのである。明治6(1873)年ウイーン万国博覧会のため渡維し、デンマーク国立博物館館長ヴォーソーから考古学を学ぶなど考古学の知識を深め、翌明治7(1874)年に再来日し考古学的な活動を展開する。「古物会」もその活動の一つであった。開催趣旨を記録するチラシによって、武四郎を含む同好の参加者が明らかとなっている。

廣告知識ヲ廣ムルニハ古今ノ物品ヲ探ヌルニ / シカズ茲ニ予ガ性古代物品ヲ愛玩スルヲ
好ミ数年輯蔵スル品少シトセズ故ニ今回 / 諸友ト謀リ一筵ヲ弊屋ニ開キ古今物品ヲ / 陳列
シ是ヲ同好諸君ニ質シ各其意見説論 / ヲ聞キ相俱ニ知學ノ一助セントス幸ヒ / 庭中ノ樹々
モ紅ヲ催シ富士ノ嶺モ白ヲ戴 / キ品川沖ニハ小春ノ浮日和ニ漁スル舟モ / 手ニトル如見エ
眺望モ亦一興ナレバ各君 / 一物ヲ御携へ且御遠慮ナク御知己御誘ヒ / 本日御來臨御衆評
ラン事ヲ希望ス

第七/ 大區五小區上大崎四十七番地

元松平主殿頭邸にて

會主	ヘンリー	ホン	セイボルト	
補助	蜷川 胤式(ママ)	古筆	了仲	西村 詰叟
	松浦馬雨齋	樋口	趨古	横山 月舎
	玉川 齊	柏木	探古	愛古堂磐翁
	栗本 鋤雲	金澤	蒼夫	

十二月六日早天より開筵

午後四時閉筵 但晴雨不論

場所は、上大崎の徳川慶喜の実弟である松平主殿旧居、会主 H.V. シーボルトが蒐集品の倉庫として借りていた場所である。参加者は、蜷川式胤(1835-1882)、四代古筆了仲(生年不詳-1891)、西村詰叟(生没年不詳)、松浦馬雨齋(雨は角の誤記)、樋口趨古(生没年不詳)、横山由清(月舎)(1826-1879)、玉川齊(生没年不詳)、柏木貨一郎(探古)(1841-1898)、愛古堂磐翁(大槻磐溪)(1801-1878)、栗本鋤雲(1822-9187)、金澤蒼夫(生没年不詳)を補助とした面々であり、会の趣旨は夫々が古物を持ち寄って意見交換を促すことにあった。ちなみに、H.V. シーボルトの著作『日本考古学覚書』「Notes on Japanese Archaeology - with Especial Reference to the stone Age-」に所載される勾玉6点が神田孝平(1830-1898)の旧蔵品として関西大学博物館に現存する⁽¹⁵⁾。

さて、開催の2日後に武蔵の好古家根岸武香(1839-1902)に宛てた武四郎の書簡には、

一昨日白銀元松平主殿やし(やしきか)ニヘンリーシーボルトと申す西洋人古物展覧会を致し、柏木、樋口、福田、蜷川等も参り、大当ニ御座候、西洋人も参申候、頗る發明仕候事も御

座/ 候、謹言、已上、

と記され盛会の様子を伝えている。さらに、「古物会」参加者の一人である柏木貨一郎(1841-1898)も根岸武香に宛てた書簡に「古物会」の内容が記している。加えて柏木は武香から前年に「土偶人」(埴輪)を譲り受けていた事実と、さらに重ねて周旋を依頼する明治8年12月11日付けの書簡である⁽¹⁶⁾。

土偶人云々御報知被下有かたく奉存候、右價は首手 / 足共全軀の物にて少も損じ無之候はゞ五圓より六七圓 / 位のもは可有之と存候。もし先年尊家より相願候土偶 / の如く、手足等損失致候はゞ、二圓位の物歟小生蔵品の物 / より損甚しくは一圓位より一圓二分位と存候其位にて / 持主買拂はゞ小生え御周旋被下度奉存候男女一對に / 相成候はゞ別而面白く且其品も尊く相成候但し右金高 / の外假箱並運送入費は差出可申候。凡二百疋位歟。 / この書状篤より可申上の所持金位云々の論と且当月六日 / シイボルトと申外国人古物会を催し候事に付、周旋仕其ゆへ、大延引之段奉恐入候。右會の広告並に其節独逸人 / の出品にてボルネヲ島の土人今日相用候雷斧石の図二 / 葉奉差上候御一笑可被下候当日出品は盛なる事に而名 / 品も夥しく出申候餘者後便奉申上候。早々頓首。

十二月十一日

柏木貨一郎拜

根岸武香様

柏木は、「古物会」にボルネオの石斧の図2枚を出品したことと、会には多数の名品が出品されていたことが確認できる。根岸武香は、父根岸友山の次男として武蔵国大里郡青山村(現 埼玉県熊谷市青山)の素封家に生まれた。家督相続の後、維新後は大宮県大総代名主を皮切りに浦和県第14区戸長などを務め、明治12(1879)年に埼玉県会議員となり、明治27(1894)年には貴族院議員に選出されるなど中央政界で活躍する一方、明治10(1887)年に吉見町の黒岩横穴群を発掘し16基の横穴墓を開口させるなど好古家としても特筆すべき業績を残した人物である。明治15(1882)年にはE. S. モース(1838-1925)が同家を訪れるなど中央の人脈にも太いものがあった。自宅には「菟古社」と称する「古器物陳列室」を開設するなど、考古学への熱意は並々ならぬもので、明治19(1886)年に東京人類学会に入会してからは、本格的にその世界に傾倒した人物である。

明治8(1875)年12月21日の尚古会には、明治政府の博物館・文化財行政に関与した蛭川式胤や柏木貨一郎、出版人で文人の福田鳴鶯(1817-1894)、国学者で法制史家の横山由清(1826-1879)などが参会し、静嘉堂に収蔵される「威斗」(写真27)などを披露し合っている。この様子については、古金銀、金の管玉、土偶人の周旋と共に根岸武香に宛てた書簡で確認することができる⁽¹⁷⁾。

今日者廿一日、連月の尚古会拙宅ニ而大坂堂島左法善之寛泉堂 / と申候仁を招き候ニ附御上陳烈、 / 福田 威斗 蛭川威斗 / 柏木 威斗 松浦威斗 / 松浦威斗 / 柏木 / 松浦 古泉友天奇品図録ニ出候 / 横山 すり形泉斗也 / 右展覽之後、上野へ参詣ニ而、東照宮囿郭 / 天の運体/拝見之事御座候、客者いつもの尚古会連中斗なり、外客断申候也、 / 何卒古金銀者如何様而も御周旋申上候間、金の管玉、土偶人共何 / 卒御周旋順上候、早々謹言、

廿一日午前八字

松浦

根岸様

(根岸家文書 4643)

さて、日本考古学黎明期に大きな足跡を残した E.S. モース(1838-1925) もまた武四郎と交流があった。明治 10(1877) 年に来日し、大森貝塚を発掘し日本の近代考古学を確立したことはあまりに有名であり、蜷川式胤の指南で陶磁器の蒐集をおこないボストン美術館の日本陶磁コレクションをつくりあげた事や明治期の膨大な生活什器、民俗資料等を本国で保管し今日に伝えた事でも知られている。モースは、明治 15 (1882) 年冬、武四郎邸を訪れ自慢の勾玉類を架台に設置し披露している様子を『日本その日その日』に記録し、同年青山の根岸武香邸も訪問している。

柏木貨一郎との交流

柏木貨一郎(1841-98)(幼名辨吉、諱は政矩、号は探古齋)は、天保 12 (1841) 年正月 16 日江戸に生まれる。諱は政矩、号は探古齋。江戸幕府の大工棟梁だったが、明治維新後に文部省博物館に就職(博覧会事務局十四等出仕・浅草文庫建築御用掛)、博覧会開催などに従事し、明治 5 (1872) 年、町田久成・蜷川式胤の正倉院・近畿地方古社寺宝物調査(壬申検査)に随行。大工棟梁としては茶室建築にすぐれ、また古美術や古書などの鑑定に長じた蒐集家でもあった。明治 10 (1877) 年に武四郎の著した『撥雲餘興』首巻の作図者の一人であり、松浦と共に同時代を代表する好古家として、国宝「源氏物語絵巻」の旧蔵者としても有名である。柏木に関する先行研究は、主に建築史学の立場から論じた大川三雄の論考⁽¹⁸⁾、益田孝(1848-1938)との関係を論じた鈴木邦夫の考察⁽¹⁹⁾、さらに益田と柏木の間を精査した山口昌男の研究⁽²⁰⁾などが代表的なものとなっている。2 人の年齢差は 23 歳であり、柏木の誕生年には、九州の漂泊途上大病を患って土地の人情に触れ、長崎平戸の宝曲寺の住職となっていた。柏木の古物への興味がいつ頃に遡るのかは判然としないが、慶応 2(1866)年に著した『高坏考』『集古印史』などの完成度から推定しても 25 歳にして確かな観察眼と考証力、卓越した作図の技量を有していたことが理解できる⁽²¹⁾。2 人の名前が文献に併記される初出は、明治 4 (1871) 年 5 月に招魂社境内の兵部省管轄の建物で開催された大学南校主催の物産会の出品目録である。この出品物については武四郎と共に鑛物門化石之部に

一 魚齒化石 右柏木政矩出品

古物之部に

一 勾玉雷斧石磐石劔類九十六品 右柏木政矩出品

と記録さる。関西大学博物館には、この時の出品物 49 点を柏木自らが図化した『石器寫図』が寄託資料として収蔵されていると共に、その内 17 点の石器が同館所蔵の本山彦一蒐集資料の中に含まれていることが明らかにされている⁽²²⁾。翌明治 5 (1872) 年 3 月文部省博覧会には、

一 雷斧 二ツ連ル者(朱文) 雷斧ノ造リ懸ケニテ 一箇

一 雷斧鋸

一 播磨國極楽寺瓦経并願文 三枚

とある。明治6(1873)年3月の文部省博覧会には、

- 一 古代櫛 八枚 柏木政矩
- 一 播磨極楽寺経瓦 二

とある⁽²³⁾。

『撥雲余興』首巻には、柏木の描いた図解が数点知られる。このうち三鈴杏葉と鋳形石については、静嘉堂に実物が収蔵されており、照合が可能である。三鈴杏葉についての柏木による解説は、

此鈴長曲一尺五寸五分、横径五寸三分、重二百四十匁

大和国十市郡なる山稜のほとりより掘せしとのミて、こまかには伝はらず。蝻川大和守家に蔵られしとぞ、其図のミを見ることひさしかりしが、明治九年神無月未つかたあるあき人来りてはからずも我ものとなれることのうれしさのあまり梓にものすとて

今日よりは手馴すものとなりにつれ うつしゑにのみみてし此鈴

具体的な場所の特定は出来ないが、現在の奈良県明日香村、高取町周辺の古墳出土と考えられ、蝻川式胤の蔵品であったことを伝えている。現品を収納する箱蓋表には、「皇和宝銅 第四」、「古鈴」、「多氣志樓 蔵」、蓋裏には、「明治九年立冬前一日 湖山樓主 長愿題籤」㊦㊦と書かれている。三鈴杏葉そのものは欠損もなく完形で鑄造製品である⁽²⁴⁾。さらに武州大里郡出土の三鈴杏葉の箱蓋表には、「皇和宝銅 第五」、「十字鈴」、蓋裏には、「古色可相掬古音楮存」、「明治十年第四月」、「湖山老人愿題」㊦㊦とある。「長愿」、「湖山」とは、梁川星巖門下の漢詩人で安政の大獄に連座して幽閉された小野湖山(1814-1910)である。もう一点の三鈴杏葉は、柏木の挿図に横山由清(1826-1879)の解説と題詠が付される。

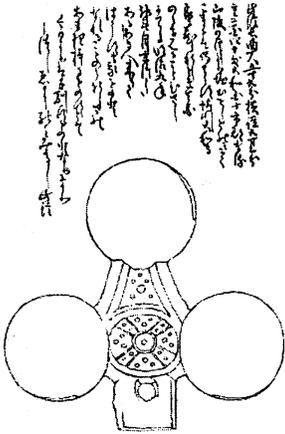
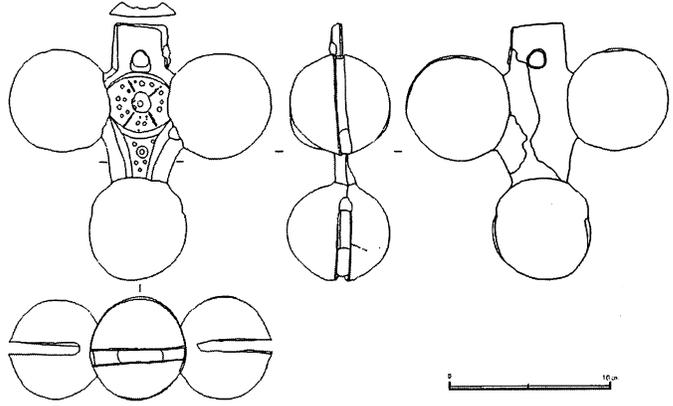
松浦の翁さきに十字鈴のいと大きなを得られたるハ前図にミゆ今また此鈴を得られてともに愛玩せらるゝと古銭の名に牛吼求友とあることなと思ひよそへられて
ふりし世を忍ふる君かあたりとや鈴もすゝろに心よせけむ 由清

同頁の柏木の挿図には大和國十市郡堀出石小刀の図

樺太人今用る所の小刀如此刀身長一寸七八分より二寸五六分の者有ヲロコタライカスメンクル人皆是は同じ蝦夷人是を左小刀と云刀少し反里あり

と解説が付され小刀自体について

長一寸八分、幅一寸、厚四分五厘、玉造石ヲ以テ作ル。余所蔵一品、其外三品ヲ見ル。是則樺太人所用ノ樺皮鞘ノ小刀形象ナリ。刀身ハ過有ランヲ恐レテ石ニテ作り、子供ニ提サセシモノカ。今蝦夷地ニテ木ニテ小刀ノ形ヲツクリ、子供ニ提サセ是ヲニイマキリト伝。ニイハ木、マキリハ小刀ノ夷言ナリ。樺鞘ハ樺皮二三枚モ重、図ノ如ク一方ヲ樺ノ細根モテ縫合タルモノニシテ、樺太地ノ土人必ズ是ヲ用ヒ、是ニ又容ルノ刀身ハ左刃ニシテ、夷人木弊ヲ削ルニモ本部ノ土人ハ向ニ削リ、樺太地ノ土人ハ手前ニ揆削ルナリ。同シ蝦夷人ト云トモ南北地ノ土人ノ風俗異ル此ノ如シ。今其樺太地ノ小刀形内地ニ遺シ事はマタ奇ト云シカ。近此武州大里郡堀出土偶人、前ニ此小刀ヲ提タリト。是好古家ノ一考ヲ凝サスンバ有ルベカラル事ナラズヤ。明治十年第一日中流 多氣志郎記



十字鈴

柏木政敏図

写真 10 (上段左)

三鈴杏葉 (箱 3「皇和宝銅 日東至宝」)

写真 11 (下段)

『撥雲余興』首巻 柏木貨一郎作図・解説

図 5 (上段右)

三鈴杏葉 実測図

最大長 15.9 cm 重量 938 g



写真 12 (左)《箱蓋表》〔付箋〕「皇和宝銅 第四」墨書「古鈴 多氣志楼蔵」

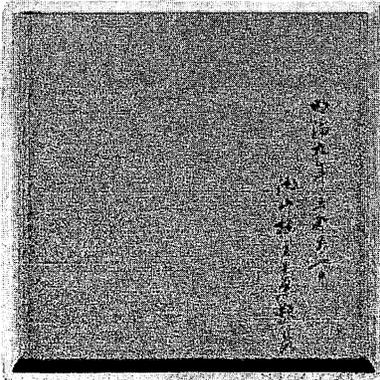


写真 13 (中)《箱蓋裏》墨書「明治九年立冬前一日 湖山楼主長愿 (〔小野湖山〕)題籤 [印] [印]」

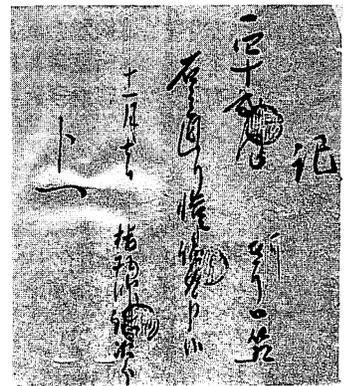
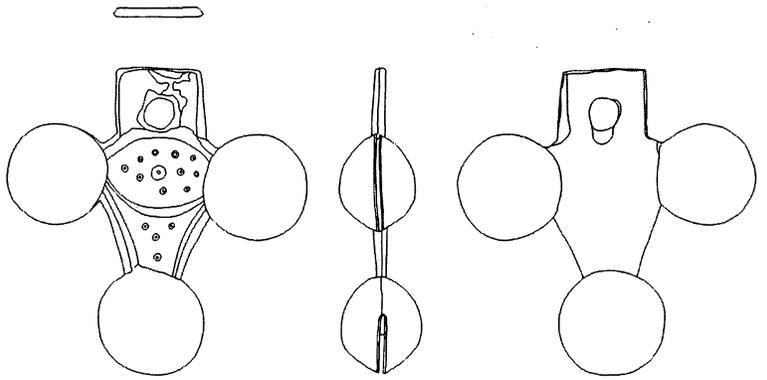
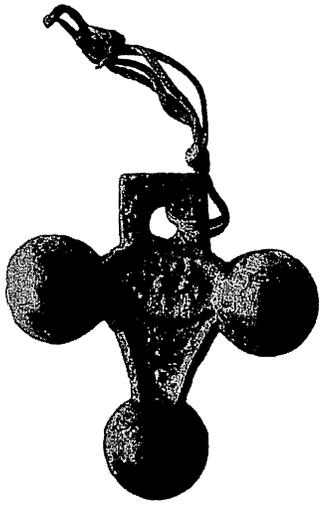


写真 14《文書》「記 一、四十式匆一ツ きり御箱 右之通り髓二請取申候、十一月七日指物師銀次郎 上」



0 10 cm

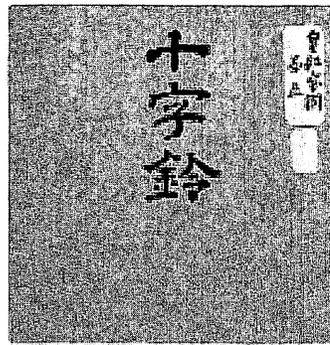


写真 15 (左上) 三鈴杏葉 (箱 3 「皇和宝銅 日東至宝」)

図 6 (右上) 三鈴杏葉 実測図

写真 16 (左下) 『撥雲余興』首巻 柏木貨一郎作図・解説

写真 17 (下中) 《箱蓋表》〔付箋〕「皇和宝銅第五」墨書「十字鈴」

写真 18 (右下) 《箱蓋裏》墨書「古色可掬古音猶存 明治十年第四月湖山老人 (〔小野湖山〕) 愿題 [印] [印]」

と記し、樺太人所用の小刀と武州大里郡堀出の土偶人(人物埴輪)に裝飾された刀を比較し、考証している点が興味深い。

鋏形石については、

鋏石 長六寸九分上幅二寸二分下幅四寸三分穿ノ処厚八分ヨリ九分ヨ

と記し、柏木によって挿図が描かれる。解説は、

と大和三山から入手した経緯が記される。木内石亭『雲根志』や木村兼葭堂を引き合いに、如何に稀覯な品であるかを強調しているのである。

箱は桐の板目を素材とした簡素な印籠造で、蓋表右上には「馬角第八」と青紙の貼り紙、右下に朱印を押印した紙が張られ、蓋裏にも白紙に「第八」と墨書されたものが貼られている。箱書きなどの付随情報はない。鍬形石は錦で仕立てられた組紐付きの袋に収納されており、松浦の愛着が感じられる。

鍬形石は、古墳時代の碧玉製腕飾の一種である。平面形がほぼ卵形になる環状を中にして、一端を長方形に近い板状につくり、他端を幅が広くて厚い笠状とし、環状と板状の接点の片方に突出のある扁平な腕飾である。このような形状から鍬を連想しその名称が江戸時代に生まれ、今も踏襲される。本資料は4世紀代に比定される⁽²⁵⁾。その他に兕觥蓋(写真24)や威斗(写真27)が柏木貨一郎の作図による。兕觥蓋は、禽獣の頭と背が蓋、喉が注口となり、尾には小動物をかたどった把手をつけ、本来は圈台あるいは四脚をもつ盛酒器の蓋である。殷代末期から西周中期に盛行し、器面全体が空想と実在の動物で飾られる。この兕觥は、蓋が獣と虎を意識した饗饗文の組み合わせによって構成される。簡略化された文様や金質等から清代に製作された倣古青銅器と判断される。『撥雲餘興』首巻の解説は、

高曲尺三寸四分 / 口径長六寸三分闊二 / 寸八分重三斤廿一 / 両有銘八字南国東 / 国命其六官此博古 / 図中所載与周夔匱 / 形制相似明治四年 / 末十月得於本所石 / 原街骨董舗多氣志 / 廬主人弘九年丙子 辱交 竹雲生阿戒

とある。威斗には、福田敬業(1817-1894)の識と武四郎の由緒書が附され、これによると江戸時代後期の考証学者狩谷棧齊(1775-183)の蔵品であったことが記される。横山由清(1826-1879)の『尚古図録』には、福田敬業の蔵品として所載されている。斗(料)とは碗状の容器に長い柄をすげた柄杓を指し酒や食物を供する際に用いるものである。『撥雲餘興』首巻の解説は、

燠斗一尺、高七寸斗の径五寸四分、深二寸厘、奇古愛すべし。内半ばより下紺緑の斑点あり。恰も松子の青苔を / 帯たるがごとし。鷲首を握りて扱ふに其手に叶う甚妙なり。恐らくは是祭酒を温むるの器なるべし、また威斗は長 / 九寸八分、深一寸六武、口径三寸五分強にして、京升の一合一勺六撮を容る。是漢の一升なりとぞ。審なることは棧齊翁の威斗 / の記に有て、尚古図録に載たればこゝにいはず。余去ぬる秋の頃、崎陽なる藤瀬氏の齎来りしを楓川亭の主人を / 以て謀るに、主人余が好古の志深きを感じて是を得せしむ。此二器共に数千年の物にして古色伯仲の間にあり。 明治八亥のとし十二月下洗 松浦武四郎しるす

とあり、現品は確認出来ないが柏木貨一郎が識を寄せ、河鍋暁斎が作図した漢代の偏壺(写真29)が一点掲載される。これは、『撥雲餘興』首巻の自跋に記されている「人に貸し与えて火災で焼けてしまった」愛蔵の品である可能性がある。実際、『撥雲餘興』首巻に所載される銅器のうち、唯一静嘉堂に残っていないのがこの偏壺であり、その事実を裏付けるものであろう。

このように二人の古物を介しての交流は、明治4年頃から明治10年頃まで続いたが、それ以降については交友を示す積極的な史料は見当たらず、明治15(1882)年に刊行された『撥雲余興』

二集には、柏木の挿図や解説も認められないのである。山口昌男も指摘しているが、大正2(1912)年の『集古』「會員談叢」に福田寒林上人談として以下の一文が掲載されている⁽²⁶⁾。

柏木貨一郎といふ人は中々人の物は感心しない人で / 何を持って行つてもキットけなすので皆んな一番其鼻を折つてやらうと思はないものはなかつたが或 / 時あんまり青瑯玕の講釋を聞かされて癪に障はつたから其次行くとき硝子切を懷中して行つて御話によ / れば青瑯玕といふものは鑛物中で一番堅いものだ相だが今日は一つその硬度を試めたいから御愛藏の品 / を出し給へといふと何をすんだといふから懷中から金剛石入りの硝子切を取出してこれで一寸障はつ / て見る積りといふと飛んでもないことをいふと早速片付られたことがあつた / 柏木氏に品物が這入るとそれが高價に賣れて行く / のは不思議な位だつた一例をいふと或入札で畠山如 / 心齋が青瑯玕も曲玉を三分で落とした夫れを十圓で / 古錢商の鷺田(先代)に賣つた鷺田が柏木に五圓儲う / けて納めると夫れが間もなく二百五十圓で某氏に賣 / れた先つ其人に徳があつたといふのでせう / 柏木は松浦多氣四郎翁をサンザンに悪口し其著は / された撥雲余興など徹頭徹尾罵倒して居たが何か原 / 因があるんだろうと思つて探ぐつてみると案の如く / 松浦が撥雲余興の表紙に使ひ度いといふので柏木か / ら古寫經を一巻借りて置いたが返へすとき其中から / 數寸計り切り取つて返へした然し柏木も柏木だから / 貸すときに其經卷を目方に掛けて置いたのだから承 / 知しない到頭松浦から切り取つた分を取り返へした / 夫れが原因だった。

實際『撥雲餘興』首巻表紙には「天平勝寶八歲其准曆抄寫」、裏表紙には「嘉元五年具註曆抄寫」の古寫經が印刷されていることからこの時の經卷を素材としたものかも知れない。

このような松浦の悪癖は他にも知られる。明治15・16(1882・83)年頃に筑前国の好古家江藤正澄(1836-1911)宅を訪れた際、座敷の床間に掛けてあつた狩野探幽作「白衣觀音図」の大幅を借りるかたちで持ち帰ってしまい、明治19(1886)年になって直接返却を訴えるも詭弁をもって言いくるめられ、否応なく承諾させられた事を江藤自らが「八〇狩野探幽ノ白衣觀音ノ大幅ヲ松浦武四郎ニ借り取セラレシ事」として記録している⁽²⁶⁾。何れにしても前述の揉め事などを契機として、明治10年頃を境に松浦の歿する明治21(1888)年まで、二人の交友は途絶えたことは事実のようである。松浦が明治20(1887)年に遺した「一畳敷」⁽²⁷⁾の造営に最も活躍しそうな柏木の名は認められないのである。その後、柏木は大工棟梁として明治23(1890)年に岩崎彌之助の深川邸日本館、明治27(1894)年には有楽町三井集會場を完成させる一方、後に益田孝(1848-1983)の所蔵となつた『源氏物語繪卷』『沙門地獄草子』『辟邪繪』や高山寺の『鳥獸戲画殘欠』『麻布山水図』など美術品蒐集家として世に知られていた中で、明治31(1898)年東京飛鳥山に建築中の渋沢栄一郎からの帰路、踏切において汽車にはねられ急逝したのである。松浦歿後丁度10年後のことであつた。

結びにかえて

小稿では、静嘉堂所蔵の松浦武四郎蒐集古物の概要と武四郎が明治3(1870)年3月に開拓判官

を免官して後、数多の好古家達との交流をもって蒐集と研究に没頭し、政府の文化財行政の中心にいた町田久成等との関係の中で明治4年の大学南校物産会から明治5年の湯島大成殿、明治6年の博覧会の何れにも出陳者として関わり、実際に静嘉堂に残る石器類などの古物の実態や好古家との交流、とりわけ柏木貨一郎との関係を示す、『撥雲餘興』所載の古物の詳細を明らかにした。さらに、稿を改め静嘉堂に残された古物を取り巻く情報から武四郎が交流した好古家達とのネットワークと明治14(1881)年以降記録された諸国歴訪の中で、武四郎が垣間見せた文化財保護思想について論究したいと思っている。

註

- (1) 吉田武三 1964 『拾遺松浦武四郎』 松浦武四郎伝刊行会
- (2) 増田晴美編著 2007 『百万塔陀羅尼の研究』 汲古書院
- (3) 内川隆志 2012 『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』
- (4) 公益財団法人静嘉堂 2013 『静嘉堂蔵 松浦武四郎コレクション』
- (5) 「武四郎涅槃図」は、別名「北海道人樹下午睡図」と称する。釈迦涅槃図になぞらえ、武四郎が「午睡」(昼寝)する姿を描いたもので画家の河鍋暁斎とその娘、暁翠の手によって明治16(1883)年から開始し、明治19(1886)年に完成した。座右に置いて愛玩した数多の古物が描かれる。ここには、蒐集した古物を介して築いた交友の歴史が表現されている。
- (6) 田村將軍像は古代中国風の鎧を身に着け湾曲する大刀を腰に佩いた歩兵像であり、全体に彩色され衣服上下は朱に、頭髮、甲冑と履物は黒、顔面は白色に塗り整えられる。前傾姿勢をとり六頭身の顔は扁平で切れ長の目を見開いた表情は兵馬俑を想起させる。加彩木製俑は、墓に副葬する葬具の一種として周代から知られ、明、清代まで継続する。本像の帰属年代については甲冑の様式としては中国的であるが、全体の造作や細部の検討から18世紀-19世紀に日本で製作されたものと見て大過なからう。右足裏には「調首内人」、左足裏に「弘仁二九月六」(弘仁2(811)年)と墨書される。
- (7) 白河市教育委員会 2011 『白河市の文化財』によると、昭和63年に市指定重要文化財(彫刻)に指定されている。同書によると文明13(1481)年大鹿島の鹿嶋神社の神前で結城直朝、政朝父子が一日一万句の連歌会を催した際に同影像を祀ったものとされているが、大正4(1915)年の『西白河郡誌』によると、「一、人麿木像一体 宗美作寛保二年俳人元々舎英翁奉納」とあることから実際には、寛保2(1742)年に奉納されたことが判っている。
- (8) 長谷洋一(関西大学文学部教授)の鑑定による。
- (9) 林巳奈夫 1984 『殷周時代青銅器の研究- 殷周青銅器綜覧一-』 吉川弘文館 p.17
- (10) 東京国立博物館 1973 『東京国立博物館百年史 資料編』 東京国立博物館 pp.574-604
- (11) 鈴木廣之 2003 『好古家たちの19世紀』 吉川弘文館 p.38
- (12) 石水博物館 2014 『館蔵品展 松浦武四郎と川喜多石水- 幕末知識人のネットワーク-』 出品目録
- (13) 三浦泰之 2013 「好古家松浦武四郎」の交友関係と人物像『静嘉堂蔵松浦武四郎コレクション』 静嘉堂 pp.109-112

-
- (14) 山本命 2011 「渋田扇帖-松浦武四郎が集めたサイン帳-」『松浦武四郎研究序説- 幕末維新时期における知識人ネットワークの諸相-』笹木義友・三浦泰之編
- (15) 徳田誠志 2003 「H.V. シーボルトと関西大学博物館所蔵資料- 日本考古学黎明期の一断面-」『関西大学博物館紀要』第9号 関西大学博物館 pp.57-78
- (16) 柴田常恵 1903 「断簡遺墨」(「雑筆六則」のうち)『東京人類学会誌』第207号 pp.381-382
- (17) 三浦泰之 「武蔵国の「好古家」根岸武香と松浦武四郎」『松浦武四郎研究序説- 幕末維新时期における知識人ネットワークの諸相-』笹木義友・三浦泰之編 p.246
- (18) 大川三雄 1994 「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について」『日本建築史学会計画系論文集』第459号
- (19) 鈴木邦夫 1998 「鈍翁コレクションのアルケオロジー」『鈍翁の眼益田鈍翁の美の世界』五島美術館
- (20) 山口昌男 1999 「日本近代における経営者と美術コレクター -益田孝と柏木貨一郎-」『札幌大学文化学部紀要』3 札幌大学
- (21) 内川隆志・宇野淳子 2013 「明治前期における好古家に実相- 松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐって-」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号
- (22) 山口卓也 2010 「柏木政矩の『石器寫図』」『関西大学旧蔵本山彦一蒐集資料目録』関西大学博物館
- (23) 東京国立博物館 1973 『東京国立博物館百年史 資料編』東京国立博物館 p.151 p.173 p.575 p.603
- (24) 内川隆志・村松洋介 2012 「静嘉堂文庫所蔵 松浦武四郎旧蔵資料の人文的研究(古墳時代金属器編)」『國學院大學学術資料館 考古学資料館紀要』國學院大學学術資料館 本三鈴杏葉は、欠損もなく完形の鑄造製品である。全長 15.9 cm、幅 16.3 cm で、重量は 938g である。現状では、三鈴杏葉の中で最大のものとされている。立聞は長さ 2.9 cm、幅 3.3 cm の長方形で、厚みは 0.7 cm、断面形態は隅丸の台形である。立聞下部には扁円部と接して径 1.1 cm の円形の孔がある。板状部は、長さ 7.0 cm、最大幅 5.0 cm で上下の弧により形成された扁円部と下方の三角部に区分でき、三角部の断面は左右両端部が突出している。扁円部の文様は、中心に径 0.9 cm の珠文をもち、その周囲は径 1.4 cm 程度の圏線で区画されている。圏線からは各 2 本単位で放射状に沈線が 8 本伸び、扁円部を 4 区画している。2 本の突線の間には 2 個の珠文が縦に配され、沈線の間には径 0.4 cm ~ 0.2 cm 程度の珠文が三角形に配されている。三角部は、中心に 0.9 cm の大粒の珠文をもち、その周囲には径 0.4 cm 程度の珠文が大粒の珠文上方に左右 2 個、下方に 1 個施文されている。三角部の右辺端部にはキサゲ状の研磨痕跡が残っている。鈴は、板状部の左右と下に径 6.4 cm、6.5 cm、6.3 cm、高さ 6.1 cm、6.4 cm、6.5 cm の球形鈴が 3 個配されている。鈴口の長さは 5.6 cm で、鈴の 3/4 程度まで食い込み、幅は 0.8 cm である。鈴内部には径 2.8 cm の石丸がある。板状部と鈴は、鈴口端部の中央部の高さで接続してある。内区は、扁円部と三角部に区分され、それぞれ中心珠文をもっている。さらに扁円部内には、2 本単位の放射状線文によって 4 分割されている。扁円部の珠文は、各区画で中心側の中央部に 1 点、周縁部に 2 点施文されており、2 本の放射状線文の間には中心珠点から周縁に向かってそれぞれ 2 点珠文が施されている。三角部には中心珠文の上部に 2 点、下部に 3 点珠文を施し、上部の珠文は並列し、下部の珠文は中心珠文直下に 2 点、さ

らにその下に1点の二段に施文されている。扁円部、三角部の形状や鈴の食い込み具合、扁円部の珠文の配置、数などをみる限り、IV段階頃のものと同類似度が高く、6世紀後半頃と考えられる。

(25) 註22 本資料は、最大長20.9 cm、最大幅12.9 cm、最大厚2.35 cm、重量566 gを計る。形状は、傘状部を三段に見える折面帯に加工し頂・谷部に沈線を施す。突起部はその中央に一条の沈線がまわっており、環状部の下端と突起部の下端が同じ高さにある。この特徴は、鍬形石の中では比較的新しい個体と考えられる。形状がよく似た資料は大阪府茶臼塚古墳、奈良県巢山古墳、岐阜県白山古墳等で出土しており、4世紀代に製作され、副葬されたと考えられる。

(26) 三浦泰之・山本命 2012 「筑前国の「好古家」江藤正澄と松浦武四郎」『北海道開拓記念館研究紀要』第40号 pp.270-272

(27) ヘンリー・スミス 1993 『泰山荘 松浦武四郎一疊敷の世界』 国際基督教大学湯浅八郎記念館編
一疊敷は、武四郎の住まいであった神田五軒町の自宅一隅に、明治12(1879)年頃から7年の歳月をもって、「木片勸進」と称し、自らあるいは66人に及ぶ友人知己をして全国の神社仏閣や歴史的建造物の古材を集めた一疊の書齋である。蒐められたものの一部をあげれば、好古家蛸川式胤(1835-1882)は、南都興福寺書院板、建築家の鈴木定吉は近江国矢橋崎八幡宮古額、出雲大社千家家からは、寛文御造営時の大社本殿床板桧など、北は仙台から南は鹿児島に至る91ヶ所から集められ組立てられたのである。翁が明治21(1888)にこの世を去るまで、訪ねてくる客をここに通してはその由来を詳しく語ったと言われている。翁の死から20年を経て多くの地理学者が武四郎の作った北方関係の地図に注目し、明治39(1905)年に日本の北方探検に関する記録や書物の展覧会が開催された際、会場を訪れた徳川頼倫(1872-1925)の関心を得たことによって松浦家の訪問が実現した。頼倫侯は、多くの遺品を見ながら一疊敷の南葵文庫への移築をも心に決めたらしく、同年松浦家に正式に購入を申し入れた。これに対し、武四郎の子一雄、孫の孫太の判断であえて購入の申し入れを断り、寄贈というかたちで明治41(1908)年南葵文庫図書館裏庭の隅に移築されたのである。明治43(1910)年『松浦武四郎記念室図』というパンフレットが発行されているように文庫内の名所的な存在であったことが窺える。南葵文庫は当時好古趣味を持つ知識人達の文化活動の拠点でもあったようで、各種講演会や展覧会、会議なども定期的に行われ、中でも頼倫侯の興味を中心であった史蹟保存や自然保護などの催しが多かった。明治37(1904)年にセントルイス万国博覧会に関わるアイヌ関連の調査で来日したシカゴ大学のフレデリック・スター(1858-1933)によって武四郎の名は広く世界に知られることとなった。(日本アジア研究学会紀要 The Old Geographer; -Matsura Takeshiro 1913) 大正12年(1923)東京を襲った関東大震災によって、かろうじて難を逃れた南葵文庫の図書は、頼倫侯の英断によって烏有に帰した東京帝国大学図書館再興のために寄贈され、最初の図書館の建物は大磯の徳川邸に移築されたのである。一疊敷は震災の半年前に麻布から紀州徳川家の移転先であった清和園と名付けられた代々木上原の新敷地内に移されており、何ら被害を受けずに残った。大正14(1925)年頼倫侯は逝去、その侯の遺志を汲んで未亡人久子夫人によって茶室「高風居」が建てられ、昭和11(1936)には、日産財閥の山田敬亮(1881-1944)によってここに移され、さらに昭和15(1940)年中島飛行機株式会社の中島知久平(1884-1949)に買い取られ、昭和25(1950)年国際基督教大学が買収し、今もキャンパス内に遺存している。一疊敷もまた数多の難を逃れ

